



§ 1

イチョウ 京都府立図書館と公孫樹の樹

1909（明治42）年4月、京都府立図書館は岡崎公園に移り設立されました。中庭用に購入した14本の樹木のうち、13本は若木の松や楓などですが、1本のイチョウだけは背が高かったことが写真からわかります。秋には、さぞ黄色く色づいたイチョウが目立ったことでしょう。人々が行きかう中庭、芝生のベンチでくつろぐ人、ランドマークのイチョウ。正面外壁の上部には、篆書体の「京都図書館」と3枚のイチョウの葉、幾何学模様を組み合わせたロゴデザインもあります。

建物の設計者、武田五一（1872-1938）は、セセッション風近代建築の図書館にふさわしい瀟洒な庭を思い描き、壁は設けず、風通しよく岡崎公園になじませる趣向を持ちました。

同年、府立図書館が刊行した書籍の表紙にイチョウのマーク、標題紙にイチョウを图案化した蔵書印と飾り枠、建築平面図にはイチョウの葉が舞う図が描かれています。

イチョウ、フィーチャーされています。



§ 2

イチョウ 宮永東山+武田五一+公孫樹

もう一点、イチョウ模様の作品があります。初代宮永東山(1868-1941)の「公孫樹文花瓶」(1908年)です。

宮永東山は、1900年パリ万国博覧会で7代錦光山宗兵衛と知り合ってから陶磁器研究に従事し、1903（明治36）年、京都で「遊陶園」結成に加わった陶芸家です。遊陶園は図案家と陶芸家が協同で制作しましたから、宮永東山は図案家のイチョウをもとにこの花瓶をつくったのでしょう。西欧で流行のアール・ヌーヴォー調の線。浅井忠（1856-1907）ら遊陶園の芸術家たちが、情熱をほとばしらせた時代の熱気が、そこにあります。

イチョウがモチーフ、偶然でしょうか？ 遊陶園メンバーでもあった武田五一がデザインした花置台に、宮永東山の花瓶が置かれた様子が写る上の写真は、府立図書館の貴賓室です。工房の錦光山で苦心してつくられたと伝わる花瓶と花置台の取り合わせは、最先端技術と芸術で20世紀の図書館を飾らんとする遊陶園プレーに思われます。



§ 3

イチョウ ほかならぬ公孫樹

なぜ、ほかならぬイチョウなのでしょう。何本かの水脈があります。

- ① イチョウは樹皮が厚くコルク質で耐火性があるため、火防の木といわれていた。
- ② 江戸時代には、伝説や信仰対象の神木だった。
- ③ 仏寺や神社に関係が深いため、在家では木忌みとなり、民家でイチョウを植えたなら不幸に見舞われるという俗信があった。
- ④ イチョウの図像は、武家や歌舞伎の紋などでは種々あったが、文様や着物の図案では少なかった。
- ⑤ 1906（明治39）年の京都府行政文書によれば、府立図書館を平安神宮境内の火除け地に設立するためには、不燃質の構造が条件だった。
- ⑥ 同年、東京では街路樹の新しい種目に、造園家の福羽逸人が推したイチョウが選ばれ、イチョウ普及の素地ができた。



左記⑤の平安神宮は、第4回内国勲業博覧会（1895年）のために建てられた建造物ですが、演出としては古都・京都。つまり、いにしへの歴史を打ち出しました。一方、京都は疎水インクラインや電気鉄道など、近代都市路線も邁進中。古さと新しさのダブルスタンダードは、イチョウにも当てはまります。

1本のイチョウは、平安神宮火除けミッションを象徴した歴史を演出しつつ、不燃の煉瓦造である近代建築図書館と響きあい、新風を吹き込みます。また、楕形ペディメントのイチョウデザインも、近代の西洋美術の粋があります。府立図書館のイチョウは、京都の二面性を託されたのでしょう。

1919(大正8)年都市計画法制定の後、全国にイチョウ並木が広がったといわれています。街路樹としての合理性がまさり、神木への畏怖や俗信が徐々に薄らいだことも背景にありそうです。西条八十「銀杏」、島崎藤村「銀杏の樹」、北原白秋「銀杏」が生まれました。

今、イチョウはかつての特権性は帯びず、ありふれた、けれども、風趣ある佇まいをそこかしこで見せてくれます。